



いわき小名浜からの便り 第2回

帰還指示解除の現実

虫の声にも秋の気配が感じられ、特に東北の秋は駆け足で走り抜けていきます。

いまだ5万人を超える人々が故郷に帰れず避難生活を続けていますが、福島県内11市町村に出されていた国の避難指示は、一部の高線量地域を除き、来年3月をめどに解除されます。これに伴い、仮設住宅の殆どが閉じられようとしております。

既に解除は段階的に進められておりますが、元の区域に戻られた方々は、9月現在、小名浜聖テモテ教会が関わっている富岡町ではかつての住民のわずか2.6パーセント（元の人口1万7千人）、除染が進み比較的ライフラインが整いつつあるとされる南相馬市ですら26.2パーセント、震災当初高線量のため立ち入りをもっとも制限されていた浪江町（“なみえやきそば”が有名）に至ってはわずか2パーセントにも満たない状況です。

富岡町には、今でも普通の生活が出来るライフラインは整備されておらず、常磐線開通だけが復興のシンボルであるかのようです。住民の方々お一人お一人の帰還に当たっての思い入れは、それぞれ微妙に違っています。家族構成、仕事、お墓問題、先祖伝来の土地への愛着などなどさまざまな思いを一様に捉えることはできません。帰還への道のりはいまだ遠いものだと思います。

ほっこりカフェのお茶の席でも当然ながらほとんど帰還への話題は盛り上がりません。帰りたけれど帰れない複雑な心模様が伝わってきます。帰っておいでとご先祖の声が聞こえても、帰れると言われても、近くにはお店もないのです。病院、学校、幼稚園、保育

園、銀行、郵便局、交通の足（バス）等、日常的に生きる環境の整備はまだまだなのです。もちろん仕事も企業が戻っていませんので、雇用は除染、廃炉作業以外は見えてきません。

いわきから一步原発に近づくと、6年前に人で溢れ賑わっていた街並みは、いまだ線量が高くバリケードで封鎖され立ち入ることはできません。富岡から相馬まで帰還困難地域を貫く6号線道路は両側をバリケードで囲まれ、高線量のためノンストップで走り抜けなければなりません。なんと、途中の信号が黄色点滅で徐行し、特に安全確認を要し寸時停止すると、一切止まらず走るよう現場で注意されるほどです。もちろん、体が露出する2輪車は通行禁止です。そんな場所も間もなく避難指示が解除されます。人権にかかわる重大な問題です。

6年半もの歳月で、人々（いわきの人々も）の脳裏から原発災害が消えていきます。小名浜も例外ではありません。慣れてしまうからか、どこから見ても日常が戻っているように錯覚してしまいます。しかし、今現在も、離れた場所や見えない所では、除染によって剝がされた汚染土が日夜増え続けています。

東京から、実際に自分の目で原発問題の深い闇の部分を見て感じようと訪問して下さる方々は、皆さんびっくりして帰られます。原発の持つ根源的な恐ろしさ、命がおろそかにされている現実をお土産に何かを感じてくださいます。

深いところで共有していただき、励まされています。

2017年9月10日
小名浜聖テモテ教会
司祭 越山健蔵